

小学生を対象とした視覚障害理解学習の実践的検討

○細谷一博
(北海道教育大学)

KEY WORDS: 視覚障害 障害理解 小学生

I 問題と目的

障害理解を推進することは、インクルーシブな社会につながるとして、障害理解学習の必要性や交流及び共同学習の重要性を述べている（文部科学省，2012）。障害理解学習は、共生社会の形成に向けて欠かすことのできない授業と位置付けることができる。その中でも、視覚障害は「見える障害」として、小学生を対象に多くの実践が報告され、小学校の 5 割が障害シミュレーション体験を実施していることが報告されている（今枝・楠・金森，2013）。そこで、本研究では、小学校 3 年生を対象にシミュレーション体験を取り入れた視覚障害理解授業を実施し、小学生の学びから、障害理解学習のあり方について検討することを目的とする。

II 方法

1. 対象：H 市立 M 小学校 3 年生の児童 29 名（男子 13 名，女子 16 名）である。対象学年は 202×年 9 月より H 市社会福祉協議会主催のノーマリー教室を実施しているため、本研究で実施する授業は、ノーマリー教室では扱わない授業内容を設定した。

2. 期間及び場所：授業は全て 3 年生の学級で 2 日間（1 日目：3 時間，2 日目：2 時間）に分けて実施した。

3. 本研究の流れ：本研究における授業実践は全部で 5 回設定した。具体的な授業のねらいと授業内容を Table1 に示す。

1 時間目は、硬貨の触察体験を通して、視覚以外の感覚を使うことで様々な情報を得ることができる事を学習した。2 時間目は、アイマスクを着用して給食を食べる体験を行った。3 時間目は、自分たちができる支援について、給食の配置を時計に見立てた学習した。4 時間目は、前回の学習で学んだ支援方法を実践したうえで、より良い支援について学習した。5 時間目は、これまでの学習を通して、人によって支援を必要とする場面や状況が異なることを理解し、自分に出来ることを考える学習を行った。毎回の授業後には、児童が「授業の振り返りシート」に記入した。

4. 分析方法：授業後に児童が記入した振り返りシートは、記述されている文章を 1 文ずつに分けて、「障害理解に関する記述」「体験に関する記述」「授業を通して気が付いたことに関する記述」「その他」の 4 つの項目に分類し、総記述量から割合を算出した。なお、分類はあらかじめ設定した分類の基準に合わせて、特別支援教育を専攻している学生複数名で協議のうえ分類を行った。

5. 倫理的配慮：本研究は M 小学校の校長に対して、書面と口頭による説明を実施した後、研究への協力や発表することについて、書面により同意を得て実施した。

III 結果(Table2)

1 回目の学習では「障害理解」に関する記述が多く見られた。具体的な記述内容では、授業において、触察体験を通して硬貨の識別を実施したことで、「目の不自由な人でも工夫があればいろいろなことができることが分かった」「物を触ることで色々なものがわかることを知ることができた」等の記述が見られた。2 回目の学習では、アイマスクをして給食を食べる活動であったため、「体験」に関する記述が多く見られた。具体的には「牛乳のストローを刺すこと」「パンやグラタン、牛乳がどこにあるかわからなかった」など、実際の困

Table1 授業のねらいと授業内容			
時数	授業名	ねらい	授業内容
1	目の不自由な人について知ろう	・触察体験などを通して、視覚障害者は視覚以外の感覚を使って様々な情報を得ることによって、一人でも出来ることがたくさんあることに気付く。	・対象児童全員でアイマスクを着用して、硬貨の識別体験を実施した。また、触ってわかる工夫の一つとしてジャンパーやリンスの容器の区別について学習した。
2	目の不自由な人の食事について知ろう	・アイマスクをして給食を食べることによって、視覚障害者が食事場面で感じる困難を知る。	・対象児童がアイマスクを着用し、授業者が給食の食器の配置を変えたのちに当事者のシミュレーション体験を実施した。
3	目の不自由な人の食事のお手伝いの仕方について考えよう	・視覚障害者が食事場面で感じる困難を知ることで、支援を必要とする場面があることを理解し、自分は視覚障害者に対してどのような支援をすればよいのかを考える。	・前時の体験を振り返って、「どんなことが難しいと感じたか」「どんなお手伝いが欲しいと思ったか」について考え、工夫シートに記入し、全体で意見の共有をした。
4	みんなが考えたお手伝いをやってみよう	・前回学習した食事場面における支援の仕方を実践し、よりよい支援の仕方について知る。	・当事者役の児童と支援者役の児童で分かれ、シミュレーション体験を実施した。当事者役の児童はアイマスクを着用した。
5	どんなお手伝いができるか考えよう	・2回の体験を振り返り、場面や状況によっては支援が必要になることを理解し、他にも自分たちができることはないかを考える。	・「視覚障害者が通で迷っている場面」と「視覚障害者によっては支援が必要になることを理解し、これらの場面」の2つを提示し、これらの場面に対して自分ができるお手伝いを考え、工夫シートに記入した。その後、全体で意見の共有をした。

Table2 児童の振り返りシートの分類結果					
分類	授業① (n=46)	授業② (n=63)	授業③ (n=52)	授業④ (n=85)	授業⑤ (n=56)
障害理解 ¹⁾	18 (39.1)	10 (15.9)	18 (34.6)	3 (3.5)	14 (25.0)
体験 ²⁾	14 (30.4)	52 (82.5)	5 (9.6)	75 (88.2)	4 (7.1)
授業 ³⁾	13 (28.3)	0 (0.0)	26 (50.0)	2 (2.4)	29 (51.8)
その他	1 (2.2)	1 (1.6)	3 (5.8)	5 (5.9)	9 (16.1)

※1) 障害理解・・・障害理解に関する記述

※2) 体験・・・体験に関する記述

※3) 授業・・・授業を通して気が付いたことに関する記述

難に関する記述が多く見られた。3 回目の学習では、クロックポジションを学習したことから、「授業」に関する記述が多く見られた。具体的には「時計の針で物の場所を教えることを初めて知った」「支援の方法がわかって嬉しかった」等の記述が多く見られた。4 回目の学習では前時に習った支援方法を実際実践する学習を行ったことから、「体験」に関する記述が多く見られた。具体的には「時計の位置で教えてもらって分かりやすかった」「こぼさないで食べることができた」「教え方が上手でびっくりした」など、わかりやすく支援をすることの必要性について学ぶことができた。5 回目の学習では、これまでの学習を通して、日常の中で気を付けることについて学習を行ったことから「授業」に関する記述が多く見られた。具体的には「点字ブロックの上に自転車を置くことは危険である」「自分でもできることがたくさんある事を知った」など、日常生活の中で自分たちに出来る支援方法がたくさんある事を理解することができた。

IV 考察

本研究ではシミュレーション体験を系統的に配置した学習活動を展開し、小学生の学びから、障害理解学習のあり方について検討した。その結果、それぞれの体験から授業のねらいを達成する学びを得ることができた。また、「実際の困難－支援方法の理解－支援の実際－他の場面への般化」の流れを作ることも重要である事が示唆された。視覚障害理解教育は総合的な学習の時間や道徳で扱われることが多いことから、今後は他の教科や領域と関連性をもたせた学習を展開していく必要がある。

文献

今枝史雄・楠敬太・金森裕治（2013）通常の小・中学校における障害理解教育の実態に関する研究（第 I 報）－実施状況及び教員の意識に関する調査を通して－。大阪教育大学紀要第 IV 部門，61(2)，63-76。

文部科学省（2012）共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進（報告）。（HOSOYA Kazuhiro）